

『麦と兵隊』映画化をめぐる二、三の問題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 五味渕, 典嗣 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6845

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『麦と兵隊』映画化をめぐる二、三の問題

五味 潤 典 嗣

1 はじめに——問題の所在

福岡県北九州市の北九州市立文学館には、火野葦平関連の大部の資料が寄託されている。この資料には、近年、渡辺考の精力的な仕事（渡辺『戦場で書く 火野葦平と従軍作家たち』NHK出版、二〇一五年。火野葦平『インパール作戦従軍記——葦平「従軍手帖」全文翻刻』集英社、二〇一七年、渡辺は「解説」を担当）でクロスアップされた従軍手帖二〇冊のほか、自筆原稿や書簡、遺品類に至るまで、数多くの貴重資料が含まれている。かく言うわたしも、日中戦争期・アジア太平洋戦争期の文学・文化とプロパガンダに対する関心から、二〇一三年以来、継続的に同文学館を訪問、資料調査を続けてきた。

本稿では、その過程で見えてきたこととして、日中戦争期に企画された『麦と兵隊』映画化にかんする経緯と曲折を取り上げる。この時期に製作された火野葦平原作の映画といえば、田坂具隆が演出を担当、小杉隆が玉井伍長を演じた『土と兵隊』（日活、一九三九年）がよく知られる。それに対し、『麦と兵隊』は、発表当初から映画化の話題がまことしやかに

に語られ、幾人もの大物監督の名前が取り沙汰されながら、結局はお蔵入りとなってしまった幻の企画である。だから、これから記されるのは、当代随一のベストセラーとなった『麦と兵隊』にかんする、複数のエージェントの願望と思惑が入り混じった夢の痕跡とでも言うべきものだ。

だが、一方で大事なことは、この幻の映画をめぐる、誰が・どんな立場から・どんなかたちで関与し、影響力を行使しようとしたか、ということだ。言い換えれば、「火野葦平」という記号、『麦と兵隊』というイメージが、誰によって・どのように管理され、どのように使われようとしていたかを考えることである。その作業は、日中戦争期を代表するメディア・アイコンとなってしまった「火野葦平」現象の内実と、その広がりについて検討する重要な一助となるはずだ。

なお、本稿では、火野葦平寄託資料内に残された書類類や手帖と、当時の新聞雑誌報道とを照らし合わせながら事実関係を追いかけていくが、わたし自身、関係資料すべての調査を終えているわけではない。北九州市立文学館が作成した目録の「解題」によれば、はじめ「火野葦平資料の会」が管理し、のち北九州市に寄託された資料のうち、整理され、目録に掲げられたものだけでも一二、四四〇件。うち、ハガキを含む書類が一〇、六〇四件を占めるが、「全体の資料群には、まだまだ未整理の手紙が残っている」という。⁽¹⁾すなわち、今後の調査によつては、さらに決定的な証拠や、根拠となる資料が発見される可能性がある。本稿での議論は、さらなる研究の進展に向けたきっかけ、里程碑の一つというレベルにとどまることを、あらかじめ申し添えておく。

2 『麦と兵隊』映画化をめぐる動向

佐藤充によれば、現在、火野葦平原作の映画として確認されているのは二五作品。⁽²⁾加えて、塩屋智佳子・坂口博が紹介した玉井政雄・貞子宛の火野書簡（一九四一年四月一日付）には、『麦と兵隊』以外にも、東宝で『煙草と兵隊』、日活で

『美しき地図』、大都で『戦陣訓』と、実現しなかった映画の企画が列記されていた。³⁾

しかし、火野作品の映画化を取り上げた研究は多くない。『麦と兵隊』についても、松竹版の監督に擬せられた清水宏のフィルモグラフィをたどる中で、映画評論家の木金公彦がコラムで触れている程度である。木金は、「清水宏が監督する予定で製作前に頓挫した最大の話題作は、火野葦平原作『麦と兵隊』であろう」としたうえで、次のように書いている。⁴⁾

ところがこの間、松竹側と火野が『兵隊三部作』映画化の正式契約をしていない間隙を縫って、日活が『土と兵隊』の映画化権を獲得し、田坂具隆監督で映画化すると発表する。しかし物資統制の非常下で、競作はいかがなものかという世論も出て、松竹『麦と兵隊』、日活『土と兵隊』という『兵隊三部作』の分配製作となる気配が濃厚になった。が、松竹側はまもなく一転して態度を変え、陸軍省情報部の立ち会いの下、松竹が『兵隊三部作』の映画化権を全面的に日活に譲渡する結果となった。これを受けて日活は『土と兵隊』『麦と兵隊』の製作準備に入ったが、結局、日活は『土と兵隊』（39年）を製作したのみで、映画法による統合で、その後の企画も流れてしまう。

木金の解説は、大まかな流れを捉えてはいるが、細部には疑問もある。ここでは、事態の経緯をより正確に押さえていくために、①松竹での企画段階 ②松竹・日活の競作が噂された段階 ③日活単独での企画の展開 という段階を追って整理・確認していきたい。

①松竹での企画Ⅱ清水宏監督『麦と兵隊』

管見の限り、火野葦平資料の中で『麦と兵隊』映画化にかんする最も早い言及は、一九三八年九月一日付けの父・玉井

金五郎宛書簡である（この書簡の封筒には、金五郎の筆跡で「十三年九月十一日着」との書き入れが見られる）。「麦と兵隊」は改造社から単行本になつて、十五日頃には出版される筈です。それから、東京の文化座と、新国劇との両劇団で、競演の形で、秋の舞台上演されます。映画は松竹で撮影することに決定しました。松竹映画はいづれ、若松にも廻つて行くこととせう⁽⁵⁾。筆まめな火野は、ほぼ同じ内容を妻の良子にも書き送っている。「今日、陸軍省から、「麦と兵隊」を歌にして、レコードを吹き込むから許可しろといふ手紙が来た」「芝居は東京だけでも知れないが、松竹で作る映画は若松の方にも無論行くだらう⁽⁶⁾」。

『麦と兵隊』の初出は『改造』一九三八年八月号。改造社版単行本の初版発行日は同年九月一九日だから、初出テクストの発表直後から、映画化を含む大がかりなメディア・キャンペーンが組織されていたことをうかがわせる内容である。だからであるう、火野の筆致はいささか高揚気味だが、注意したいのは、火野が松竹での映画化を「決定」という語で表現したことである。周知のように、初出『麦と兵隊』の掲載誌選定には、陸軍（とくに、火野が所属した中支那派遣軍）の強い意向が介在していた。火野も、先掲の金五郎宛書簡で、「麦と兵隊」につきまして、舞台化や、映画化には、陸軍の方から特別の指導や援助をする模様であります」と書き送っている。

しかも、火野が書簡に記した内容は、すでにリークされた情報でもあった。一九三八年八月二七日付『東京朝日新聞』夕刊で、松竹大船が「国民精神総動員の体制に順応」する企画として、高田保原作・島津保次郎監督『日本人』に続き、シナリオ高田保・監督清水宏で『麦と兵隊』の製作を決定、「この映画を力めて文芸の香り高き大作たらしむべく、出来れば目下〇〇にある小津安二郎監督とも連絡を取つて万全を期したいと大変な意気込みで、準備完了次第清水監督は男優軍を率ゐて上海、南京方面に大ロケーションを敢行する」予定だと報じられている（無署名「麦と兵隊」を松竹で映画化す 清水監督俳優を引導して）。もちろん明らかなアドバルーン記事と見るべき内容だが、小津安二郎の名が出ているのが興味を惹く。小津は火野より三歳年長、三三歳で応召し、火野とほぼ同じタイミングで上海派遣軍の一員（田中真澄

は、小津の所属部隊を野戦瓦斯第二中隊（部隊長Ⅱ指宿三郎少佐）と推定している）として出征している。現在公表されている小津の「陣中日誌」には、火野の『麦と兵隊』を「徐州会戦に参加した僕にも、たとえば麦の海なり麦畑を横切つて進む行軍なり、時にはよりどころなく感じる銃後に対しての忿懣なりに、共感の点があり、敵襲に際しての作者の行動措置にも頷かれるものがあつた」と高く評価する一方で、『土と兵隊』については、「火野葦平のその仲間のその上官のそれ等への功績報告書」「軍の知遇に感じて少しく脂っこく御用を相つとめたと思われるふしが仲々多い」と手厳しい⁸⁾。小津当人の戦場体験とのかかわりも含め、もし小津に『麦と兵隊』映画化の話が伝わっていたらと想像することは楽しいが、それは本稿の問題ではないだろう。さしあたって押さえるべきは、当初の時点では火野自身も、おそらく陸軍側も『麦と兵隊』は松竹から映画化されると理解していたことである。メガホンを取るのは清水宏。映画史的に言えば、彼が『有りがとうさん』（一九三六年二月）、『風の中の子供』（一九三七年一月）、『按摩と女』（一九三八年七月）など、次々と佳作を発表していたタイミングに当たる。

清水は、一九三八年九月に肥後博とともに若松の火野留守宅で金五郎と面談を済ませ、上海では『土と兵隊』執筆中の火野や、「従軍ペン部隊」の一員として南京に向かう直前の久米正雄とも接触している（清水「麦と兵隊を訪ねて」『映画之友』一九三八年二月）。ロケーション撮影を得意とし、『有りがとうさん』や『按摩と女』では、山あいの溪谷を流れる川がキラキラと日差しを反射する情景を印象的にフィルムへと定着させた清水が、地平線いっぱいには広がる黄金色の麦畑を撮ったかもしれないわけだ。

しかし、『麦と兵隊』をどのような映画にするかには、それなりの揺れもあった。最初の報道では劇映画としての構想が語られていたが（だから小津の名も出たわけだ）、新聞記事ベースでの続報では、「陸軍省の応援」を得て「実在の主人公である葦平軍曹をそのまゝ、この映画の主人公に配し多数の兵士をも動員する計画で、素晴らしい記録映画としてわが戦争映画の一步前進を約束する」はずだ、と内容が変化している（無署名「麦と兵隊」自作自演 葦平軍曹主人公に、俳

優のない映画」『大阪朝日新聞中支版』一九三八年九月二二日。

そもそも『麦と兵隊』は、報道班員・火野葦平による日録体のテキストだから、いわゆるストーリーが作りにくかったという事情はあるだろう。しかし、それ以上に重要なのは、同時代の「大陸映画」をめぐる動向である。晏妮が詳しく論じたように、日中開戦後、各映画会社は中国大陸での戦争に取材した映画を多く製作したが、「フレーズとしての大陸があなたもファッションのように」扱われたものや、「タイトルに大陸を貼り付けたりするだけの作品」ばかりが目につく状況だった⁹⁾。そして、その象徴的な事例として挙げられていたのが、長谷川一夫・李香蘭の「大陸三部作」に他ならなかった。当時の映画批評は、こうした「大陸もの」劇映画を「際物」と酷評、「大陸三部作」も、圧倒的な観客動員とは裏腹に、批評家たちの厳しい批判にさらされていた。じつさい、『麦と兵隊』の映画化を「時局的に絶好な作品、といったやうな点だけが買はれてゐるやうな気がしてならない」と危惧する声は、確かに挙がっていたのである（田中三郎「旬報」とだんぎ」『キネマ旬報』一九三八年九月二一日）。

加えて、もし松竹が「記録映画」的な方向性を模索していたとしたら、東宝のドキュメンタリー映画『支那事变後方記録 上海』（亀井文夫編集、一九三八年）『戦線後方記録映画 南京』（秋元憲編集、一九三八年）の高い評価を意識した可能性がある。『キネマ旬報』には、小さな記事ではあるが、松竹大船が「国策的見地に立脚」するために「文化映画部の陣容強化」を図っていること、そのうえで、キネマ旬報社も協力して「清水宏監督が現地撮影の「麦と兵隊」の製作を機に第一線への飛躍を試ること」が報じられていた（無署名「本社と協力 大船又映画部陣容強化」一九三八年一〇月一日）。清水宏は、先掲のエッセイ「麦と兵隊を訪ねて」で、東宝で『南京』の製作を担当した松崎啓次と上海で会ったと記しているが、いったい二人は何の話をしたのだろうか¹⁰⁾。

②松竹・日活の競作？——玉井金五郎の当惑

だが、一九三八年末になつて、事態は大きく動くことになる。『東京朝日新聞』一九三八年一月三〇日付けの記事で、日活が『麦と兵隊』『土と兵隊』映画化権を「正式に獲得」したと報じられたのである。記事は、「之によつてこれ等を映画化する意向のある松竹が正式に決定するとすればこゝに競映が実現するわけである」と結ばれていた（無署名「火野氏の作品 日活で映画化 松竹と競映？」）。松竹での企画が「意向」段階であるかのような言い方が気になるが、これに慌てたのが、若松の留守宅を預かる玉井金五郎だった。この件で、金五郎が戦地の火野に送つた書簡が残されている。重要な内容を含むので、長文となるが、引用しておきたい（引用文中の傍線は引用者）。

拜啓其後無事御健闘ヲシテ居ル事ト思ヒマス内モ子供等初メ一家無事デス御休意下サイマセ 今度中山氏が渡広ニ当リ御話ヲ承リマシタ日活ニ対シ土麦ト兵隊映画化ノ契約ガ決定セラレシ件ニ付今日肥後博氏ノ来訪ヲ受御話ニ依リマス ト日活カ契約ヲ成立シテ映画化ノ独専權ヲ得タト宣伝的ニ申シテ居リ其談話ノ内ニ肥後氏が菊池氏ニ契約ノ件伺ヒマシタ所日活トハ契約シタガ君ノ方ニハ契約ハ無イジヤア無イカト言ハレソレハ契約トカ物質トカハノキニシタ情誼上ノ契約ガ〇〇中佐殿ト有ウト肥後氏が答ヘタリソレデ〇〇氏ト照合スルト言ハレタソウデス父モ何事モ一切ニフレヌツモリデ居リマシテ此件日活高村氏ヨリ井上安常氏大場彦三郎両氏ヲ通ジ相談ハ有リマシタガ断テ居リマシタ所中山氏見送りノ節ニ此件ニ付テ中山氏ニ伺ヒマシタ所東京ニテ諒解ヲ与ヘテキタトノ話デアリマシタ為ニ今日迄ノ松竹トノ關係其他肥後清水御両氏モ現地上海迄乗出運動ノ有タ事モ承知シテ居リ案内ノ感ハ致シマシタガ此様ナル方面ノ經驗ヲ持タヌ父ハ親友ノ顔立ニモナリ中山氏ノ言ヲ諒トシテ菊池氏ニ書面ヲツケタ様ナ事デアリマシタガ今日肥後氏ヨリ承レバ日活デハ私ト契約シタト申サレテ居ル由ニテ （文字明） 分ハ遺憾ニ思ヒ日活ノ高村氏ヨリ急報ヲ以テ広東ノ中山氏ヤ勝則ニ根本ニ付テ松竹トノ契約又ハ〇〇中佐殿ト勝則ガ一任シテ有タモノカ今一ツハ中山氏ニ松竹対〇〇中佐殿トノ約束ガ「テツテイ」シテナカツタカ又其他ニ何カ理由ガ有テノ事カ両社ノ權利争ヒガ公ニ天下ニサラケ出サレ〇〇中佐殿ヤ勝則ヤ父等

ノ名ガ出ルコトニナルト面白カラヌ事ニモナリ是ガ真相ヲ至急御知セ下サイマセンカ 肥後氏ノ話ニ情報部ノ柴野中佐殿ニ肥後氏ガ松竹ノ立場ヲ申上タ所ガ葦平君ノ父ガ契約シタト有レバ是非ナイカラ相方両会社デヤツテハト申サレタ由承リテ父ハ残念ニ思ヒマシタ父ノ立場ハ肥後氏ニ一切ヲ申上テ諒解ハ出来マシタガ此様ナ権利ニ関スル事等ニ父ガ出タト思ハレル事ガ世間ニモ葦平ノ名前ニ対シテ好クナイト思ヒマス此書面着キ次第出来レバ電報ニテ御返事下サイ都合デハ父ガ正月休ヲ兼而上京シテ円満ニ咄ヲ形ズケタイトモ思フテオリマス 中山氏ニモ別紙出タ筈デスガヨロシク申シテ下サイ^①

金五郎の文面はいささかまわりくどいが、おおよそ次のようなことが言われている。(i)『麦と兵隊』『土と兵隊』映画化をめぐって、日活との契約を主導したのは東京の中山省三郎。日活は、「映画化ノ独専権ヲ得タト宣伝」している。この手紙に先だって、金五郎のところにも、日活の「高村氏」「井上安常氏大場彦三郎両氏」から「相談」が来ていたが、金五郎は「何事モ一切ニフレヌツモリ」で取り合わなかった。(ii) 中山省三郎が中国・広州に向かう直前、若松に立ち寄り、金五郎に日活での映画化について伝えた。金五郎は、松竹の話聞いていたし、「肥後清水御両氏モ現地上海迄乗出運動ノ有タ事ヲ承知」していたので不思議に思ったが、中山を信頼し、「菊池氏ニ書面ヲツケタ」。(iii) 報道を知った肥後が若松を再訪、以下の内容を伝えた。日活の宣伝について「菊池氏」に問い合わせたところ、日活とは「契約」があるが、松竹はそうではない、と言われた。肥後は、確かに書面を取り交わしたわけではないが、松竹側は「○○中佐」と「情誼上ノ契約」があるはずだ、と応じた。(iv) 肥後によれば、日活側は、自分たちは金五郎と契約した、と吹聴している。陸軍情報部の柴野中佐からは、「葦平君ノ父ガ契約シタト有レバ是非ナイカラ」、いっそ両社でやってはどうか、という話も出た。困惑した金五郎は、自分が火野作品の権利関係のことにしやばっていると思われたくないし、松竹・日活の競合が火野や○○中佐に迷惑をかけることになっては申し訳が立たないから、自分が上京して交渉にあたってもよい、

と書いている。

金五郎の焦慮が如実に伝わる文面なので、少し補足する必要もあろう。文中の「菊池氏」は、おそらく菊池寛だろう。拙論でも触れたように、菊池は火野の芥川賞受賞後第一作にあたる『麦と兵隊』が『改造』に掲載されたことに憤り、戦地の火野宛に難詰する手紙を送り付けていた。火野は小林秀雄に仲裁を依頼、その取りなしで『土と兵隊』の初出は『文藝春秋』に掲げられたという経緯がある。¹²⁾「〇〇中佐」は、金五郎が名前を挙げることを憚り、しかも火野との間で符牒だけで了解される人物だから、火野を陸軍報道部に引き抜く上で中心的な役割を果たした中支那派遣軍報道部長の馬淵逸雄中佐か。「柴野中佐」は、陸軍省情報部で美術・演劇・映画を担当した柴野為亥知のことだろう。¹³⁾このとき柴野は、「映画演劇に出て来る陸軍関係の内閣」を行っていた（吉川英治、岸田国士、長谷川時雨、柴野中佐、城戸四郎ほか「躍進日本を彩る 三聖代を貫く精神 映画「日本人」を繞る座談会」『東京朝日新聞』一九三八年一月三〇日～二月四日）。

映画版『麦と兵隊』をめぐる激しいつばぜりあいは、一躍メディアの寵児となった「火野葦平」イメージの肥大化を象徴するエピソードと言える。この一九三八年末というタイミングは、『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』『花と兵隊』が、『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』で『海と兵隊』（単行本化の際に『広東進軍抄』と改題）が同時連載されるという異例の事態が起こっていた時期でもあった。戦争をビジネス・チャンスと捉えた大手メディア企業が、こぞって「火野葦平」という記号を貪欲に欲望していたのである。当の火野本人が「不気味なものを感じた」と述懐した、仁義も何もあつたものではない競争に巻き込まれてしまった金五郎の当惑は想像するにあまりある。¹⁴⁾だが、頼むから「真相」を伝えて欲しいと書き送ったこの手紙に対する返信は、現在確認できていない。火野の親友で、東京で彼のエージェントとして活動した中山省三郎のコメントも同様である。

一方、中国から戻った清水宏は、着々と構想と準備を進めていた。『キネマ旬報』一九三九年一月一日号には、のちに日活での映画版『麦と兵隊』の監督に擬せられた内田吐夢らとの座談記事が掲載されている。そこで清水は、『麦と兵隊』

について、季節の関係もあるので、自分としては『土と兵隊』から取り組みたいこと、「正月勿々」には中国大陸での撮影を始めたいが、杭州湾での「敵前上陸」シーンに陸軍の許可が出ないので「弱つてゐる」と語っていた（内田吐夢、清水宏、飯田心美ほか「内田吐夢・清水宏 映画放談」）。つまり、東京の陸軍省（情報部だろう）も、この時点では松竹での製作を前提に対応していたことがうかがえる。

③日活での映画化企画——満洲映画協会との接点

『麦と兵隊』映画化権をめぐる「熾烈な獲得戦」は、翌一九三九年一月下旬、日活側に軍配が上がるかたちで幕引きが図られた（無署名「『兵隊』二部作日活で製作決定」『キネマ旬報』一九三九年二月一日、無署名「短信用息」『文化映画』一九三九年二月）。一月二〇日に、日活が『麦と兵隊』『土と兵隊』の独占映画化、松竹が両作の製作中止を正式に発表したのである。

タイミングを考えても、両社の間で水面下の交渉が行われたことは間違いない。陸軍側も関与した公算が大きいが、現段階では詳しいことはわからない。先に引いた『キネマ旬報』の記事には、「日活では田坂具隆監督のシナリオが脱稿したので、山崎営業部長、中田製作部長、他一行五名は陸軍報道部の正式許可と後援を得て二十八日東京発三十日長崎出帆の上海丸で現地関係者との最後の交渉及びロケハンに出発」すると伝えられた。日活が社をあげてこの企画に取り組みもうとした様子が伝わってくる。

ちなみに、一九三九年初頭は、映画業界で「火野葦平」が最も商品価値を持ったタイミングもある。『読売新聞』の記事「大当りの葦平物 五本映画化極る」（一九三九年三月三日）では、日活⇄田坂具隆の『麦と兵隊』『土と兵隊』のほか、新興キネマが『花と兵隊』を、東宝京都が村山知義・今井正の共同演出で『煙草と兵隊』を製作する予定であること、成瀬巳喜男は火野出征前の作品である『河豚』を脚色・演出するプランがあることが紹介された。『土と兵隊』以外は実

現しなかった企画ばかりだが、どんな映画になったか、想像をかき立ててくれる話題ではある。

だが、まずここでは、日活による『土と兵隊』に、軍や政府の大きかりなバックアップがあったらしいことを確認しておきたい。例えば、さきに名前を挙げた馬淵逸雄の著書『報道戦線』（改造社、一九四一年）には、この映画に対する軍の積極的な協力態勢が紹介されている。曰く、「撮影隊は、昭和十四年三月より約三ヶ月間に涉り、関係各部隊と連絡し、多大の便宜を供与した」。その間、第二師団（編成地＝宇都宮）所属の兵士が「絶大なる後援を与へた」というのは、エキストラとしての出演も含まれていたのではないか。また、『土と兵隊』は、当時の「国策」に叶った映画として検閲手数料が免除となり、一九四〇年には文部省推薦映画にも登録された。日活は撮影中から積極的にメディア露出を企てたが、中でも興味深いのは、上海派遣軍（当時）の杭州湾上陸作戦二周年を記念して、当時の指揮官だった柳川平助興亜院総裁（陸軍中將）と幕僚が映画『土と兵隊』の鑑賞会を催したというニュースである（無署名「銀幕で見る」あの日「面白いね」と当時の覆面司令官　きのふ柳川部隊長」『東京朝日新聞』一九三九年一月六日）。しかも、この記事の下には、まるで符節を合わせたかのように、「火野葦平軍曹帰還」が伝えられている。すなわち、映画『土と兵隊』公開は、映画が描いた過去の作戦を想起させるタイミングで、火野本人の「帰還」と連動する時期に設定されていたのである。こうしたメディア・キャンペーンが、日活だけの力で企画できたとは考えにくい。日活版『麦と兵隊』は、こうした大ヒット作の〈第二弾〉として予定されたものだった。

とはいえ、日活側もすぐに『麦と兵隊』の準備ができたわけではなかった。わたしが調査した限り、次の動きが見えてくるのは、一九四〇年七月の段階である。日活との契約を主導した中山省三郎が、若松に戻った火野に「映画『麦と兵隊』のことが特に持ちあがつてゐる。これは君の上京を待つて懇談といふことにしてある。かなり大規模な話！」と書き送っていたのである（一九四〇年七月二十九日付¹⁵）。中山が興奮した理由は、同年一月二五日付書簡の中身から推察できる。

どうやら映画版『麦と兵隊』を、日活と満洲映画協会の共同製作とする話が持ちあがっていたようなのだ。

○高村氏と海岸にゐる水町君を訪れ二泊して帰つて来た。水町君のシナリオは程なく成つて君の意見をきき、更に満洲へ行つて完成される筈である。高村氏はそれにつき、一日ごと若松にゆき一泊して渡満の筈である。二日か三日の飛行機（福岡―新京）をせひとも頼んで欲しい由¹⁶。

「高村氏」は、以前の中山書簡にも名前があつた、日活のプロデューサー・高村正次のこと。「水町君」はおそらく水町青磁だろう。そして、この中山書簡の欄外には、次のような書き入れが残されていた。

高村氏より／色紙の頼み。／これは満洲への／おみやげである。

土と兵隊／為 林顕蔵氏

花と兵隊／為 甘粕正彦氏

麦と兵隊／為 根岸寛一氏

右は絵と文（いつもの）／計三枚である。¹⁷

甘粕は言わずと知れた満洲映画協会の理事長。根岸寛一は当時満映理事で製作部長。林顕蔵は、満鉄出身で満映創業当時からの理事。つまり、この三枚の「色紙」は満映の大幹部への「おみやげ」である。

中山はこの計画に相当注力していたようだ。翌週の一月三日付け書簡（速達）では、同じく日活で進んでいた『美しき地獄』映画化の交渉とあわせて、高村の母親が重病で満洲行きが遅れているが、『麦と兵隊』前半のシナリオ原稿が中

山のところに持ち込まれており、その原稿に火野が「十分筆を加へ、或は再考を要するところは「要再考」といふ風に書込んでもらいたい」という意向が補足されている。¹⁸ 同じく二月一日付中山書簡では、いよいよ後半部分のシナリオが完成、火野の「訂正増補」のうえ、満映の荒巻芳郎が「映画台本としてのコンテを作」る手はずになっている、とある。「なほ先日申越の色紙もたのむ。麦士花三枚、甘粕正彦、林顕蔵、根岸寛一の三氏へ一枚づつ」と念押ししているあたり、中山の焦りも伝わってくる感じだ。¹⁹

それだけではない。この中山書簡には、高村正次本人の一筆も同封されていた。日活Ⅱ満映の『麦と兵隊』には、なんと李香蘭の出演が予定されていたらしい。

一、筋書は思ふ半分も書けて居ません

一、李香蘭其他を出すのは従来の兵隊映画に一向婦人の入場者がないので当局は残念に思て居ます 物質の節約を婦人の手を(一字不明)■ねばならぬ訳ですから 今度は初めより婦人向にして常設館へ引寄せ見て居る内に兵隊の有難さと戦争を理解させたい一つの野心もあります撮影台本になるまでには相当変化されて行きます 従つて今送る分はほんの序の口です²⁰

北九州市立文学館での調査の際、この書簡を見つけたときは心底から驚いた。実現こそしなかったとはいえ、映画版『麦と兵隊』で、火野葦平と李香蘭という日中戦争期を代表する二大メディア・スターの競演が見られたかも知れなかったというのだから。ここでの「当局」は陸軍のことだろうが、高村によれば、「当局」は「兵隊映画」に女性観客が少ないうことを問題視していた。日活Ⅱ満映の『麦と兵隊』は、その意を汲んで、映画自体を「婦人向」とし、軍需最優先の物資不足の時代に生きる女性たちに戦争協力の意識を持たせることを目指していた。

だが、火野の読者なら誰もが知るように、「花と兵隊」ならともかく、原作『麦と兵隊』に李香蘭が出る余地はない。つまり、構想されていた映画版『麦と兵隊』は、火野のテキストとはかなり異なる内容だったらしいことも推知できる。

一方、李香蘭側にしても、この企画を受ける意義はあったのではないか。この書簡が書かれたのは、「大陸三部作」の三作目『熱砂の誓ひ』（東宝⇨華北電影、一九四〇年一二月）の公開直前というタイミングで、おそらくは李香蘭サイドも「大陸三部作」以降の展開を模索していた時期に当たると言える。さらに言えば、李香蘭の出演作とそのファンをめぐっては、とくに軍の側から厳しい批判の声が挙がっていた。古川隆久は、一九四〇年七月公開の『支那の夜』（東宝⇨中華電影）が、映画検閲強化のきっかけとなったという当時の証言を紹介している。⁽²⁾日活⇨満映の『麦と兵隊』に、どの時点で李香蘭がキャストイングされたかは分からない。しかし、この高村書簡は、軍内部にも李香蘭の動員力を評価する声があったことを伝える貴重な資料と言える。一九四一年二月一日、有名な「日劇七回り半事件」の主役となった李香蘭の気持は、それぐらい爆発的なものだった。

少なくとも一九四〇年夏には一連の事情を了知していただろう中山省三郎が、「かなり大規模な話！」と興奮するのも肯ける。だが、中山が繰り返し催促の手紙を送っているのは、火野の筆が進まなかったからだろう。一九四〇年一二月二七日付の中山書簡では、「麦と兵隊」のシナリオ原稿はどうなつたらう。原作者として不満も希望も大いにあることと思ふが、それらは遠慮なくいふこと。とにもかくにも君の返事を待つ」とある。⁽³⁾それから一ヶ月後、一九四一年一月二七日付の書面では、「満映より、製作部長、脚色者など上京して君の来るのを待つてゐる。高村氏よりは、まだかまだかといつて来てゐる」と速達で書き送っている。⁽⁴⁾これまでの経緯を考えると、製作部長は根岸寛一、脚色者は荒巻芳郎のことだろうか。

もちろん火野自身も、この件を忘れていたわけではなかった。火野の手帳「東京用件メモ」は、文藝春秋社版の『文藝手帳』（一九四〇年版）に、一九四一年二月上京時の用件を備忘録風に書き出したものだが、そこには、前年（一九四

○年) 一二月に陸軍省報道部長・大本営陸軍報道部長に着任した馬淵逸雄を祝う宴席の予定(二月二日)とともに、「③『麦と兵隊』シナリオ」の文字が記され、鉛筆の丸囲みで強調されていた。²⁸ ちなみに、この「東京用件メモ」には、一九四一年二月一日から四月五日までの予定が書き込まれていた。火野の予定に変更がなかったなら、「日劇七回り半事件」の当日、火野は東京に滞在していたことになる。だとすれば火野は、自らと同様のメディア・スターとなっていた李香蘭をめぐる騒動を、いったいどんな思いで眺めていただろうか。

いまのところ、火野葦平資料内で映画版『麦と兵隊』について書かれた最後のものが、第二節の冒頭でも紹介した弟・玉井政雄宛書簡である(一九四一年四月一日付)。この書簡は、火野が自身と同じく中国に出征、作家デビューも果たしていた弟に宛てて、六芸社の「帰還作家叢書」シリーズへの参加を伝えたものだが、その近況報告の中に、「『麦と兵隊』撮影は六月になる。六月、満洲、北支にわたる。これは満映と日活共同製作。監督、内田吐夢。玉井伍長は小杉勇。満洲では、関東軍の歴史を書くことをたのまれてゐる」とあった。

ここでは、監督として内田吐夢の名前が出ている。だが、日本敗戦直前に満映に移ることになった内田の自伝や評伝には、『麦と兵隊』映画化の話題は出ていない。李香蘭は、朝鮮軍報道部が後援した国策映画『志願兵』(一九四一年一月)に出たあと、松竹で佐野周二とコンビを組んで、『蘇州の夜』(一九四一年一月)に出演するが、このあと火野と接近することはなかった。現時点での詳細はまだ掴めていないが、日活の経営問題や総動員体制下の映画統制のうねりの中で、映画版『麦と兵隊』企画は頓挫したようだ。

3 「火野葦平」とは誰なのか？

ここまで、幻の映画『麦と兵隊』の行方を追いかけてきた。もちろんこれは幻の映画なのだから、文学史にも映画史に

も登録されないエピソードではある。しかし、この間の経緯に鑑みれば、利益追求を優先させるメディア企業の移り気な体質を表徴する以上の問題が見えてくるように思う。最後に、今後の課題として、三つの論点を挙げておきたい。

まず第一に考えるべきは、「火野葦平」の商品価値の問題である。いわゆる「兵隊三部作」のうち、『麦と兵隊』『土と兵隊』が、演劇・ラジオドラマ・歌謡曲・浪曲・創作ダンスなど、複数のジャンルへと翻訳・翻案されていたことはよく知られる。本稿が縷々追いかけてきた通り、激烈な競争を繰り広げていた当時の映画会社にとっても、『麦と兵隊』はぜひとも欲しいコンテンツだった。現在進行形で戦われていた中国大陸での戦争を扱った映画にはつねに検閲のリスクが付きまとうが、陸軍報道班員の立場で書かれた火野のテキストは、軍のお墨付きを受けやすいという判断も働いたはずである。そもそも、これだけ錚々たる監督の名前が拳がること自体、この時期の「火野葦平」の商品価値の高さを物語るエピソードだろう。

とすれば、次に問題となるのは、「火野葦平」というメディア・イメージである。火野が何を語ったか・何を書いたかというだけではなく、「火野葦平」がどのように語られていたかが重要なのだ。ならば、メディア・スターとしての「火野葦平」のイメージをいったい誰が、どう管理するのか。口さがないメディアでさまざまに話題となり、話に尾ひれが加わりながら、日本語の読者なら誰もが識る存在となってしまった「火野葦平」のイメージを、誰がどう差配するかが問題となる。

そして、その鍵を握るのが、中山省三郎という人物に他ならない。⁽²⁶⁾ わたし自身は、兵隊作家「火野葦平」は、複数の勢力・複数のプレイヤーがせめぎ合う中で生み出されたメディア・スターだと考えているが、そこで中山が果たした役割は特筆に値する。火野資料の書簡類を追いかけていくと、『糞尿譚』での芥川賞受賞直後から中山は、火野の代理人として献身的に活動した様子が伝わってくる。坂口博は、中山のことを「出版促進者」と呼んだが、それ以上に中山は、東京での火野のエージェントであり、マネージャーであり、プロデューサー的な存在でもあった。『麦と兵隊』映画化をめぐる

経緯からも明らかのように、中山は火野に先だつて企画の交渉に立ち会い、重要な判断や決定を下す局面さえあったのである。

一方、軍内部の動向にも目を向けておきたい。従来、火野葦平とのかかわりという意味では、中支軍の馬淵逸雄との関係が重視されてきた。しかし、『麦と兵隊』映画化の経緯を見ていくと、陸軍中央の情報部が相当深くコミットしていることが見えてくる。金五郎の書簡に名前があつた柴野為彦は、満洲や上海での映画工作に関与した重要人物でもあつた。つまり、「火野葦平」をめぐる、陸軍内部でも、複数の人間が影響力を行使していたことになる。『麦と兵隊』『土と兵隊』映画化に菊池寛も一枚噛んでいたというわたしの推定が間違いでないなら、まさに「火野葦平」は、複数の利害関係者による葛藤と交渉の現場となつていたわけだ。

こうして見てくると、「火野葦平」のイメージが、火野本人にも責任が持てないレベルにまで肥大化していたことがよくわかる。一般に近代のメディア・スターは、こうした無責任なイメージの拡大と再生産に直面するものだが、火野の場合特殊なのは、彼のイメージ構築に軍がかかわっていたことだ。おそらくその状況が、火野の立場をさらに複雑なものとした。「火野葦平」を一躍スターダムに押し上げた『麦と兵隊』が、実質的に陸軍の後押し・後ろ盾のもとで書かれていた以上、彼自身がメディアで語られる自己のイメージを拒否することは難しい。あるいは火野本人にとって、より正しくは玉井勝則という一個人にとって、メディアの中の「火野葦平」像とどう向き合うかは、まさに彼自身の実存にかかわる問いではなかつたか。

そこで気になるのが、火野葦平が日活Ⅱ満映で企画された『麦と兵隊』シナリオの確認を、およそ二ヶ月間も放置していたことである。あえて想像をたくましくすれば、あるいは火野は、李香蘭も出演するというシナリオに対し、「これは『麦と兵隊』ではない」〈これは自らのテキストではない〉という思いを募らせていたのかもしれない。さまざまな立場の人々の思惑や利害関係、期待を受けとめ続けることに疲れてしまった玉井勝則が、自分の手に負えないほどに膨張し、姿

を変えてしまった「火野葦平」「麦と兵隊」のイメージを前に、どうしてよいか解らなくなってしまったのかも知れない。

いずれにしても、今後の火野葦平研究にとって、火野のテキストと「火野葦平」をめぐる語られた言葉やイメージとの距離は、つねに意識されるべき問題だろう。もちろん、当の火野自身が、そのギャップとどう向き合い、どう受けとめていたのか（受けとめていなかったか）も、改めて吟味する必要があるはずだ。

〔附記〕本稿は、第一〇七回河伯洞読書会（二〇一七年二月一七日）での講演内容をもとにしたものである。玉井史太郎氏、坂口博氏ほか、当日にさまざまな意見を頂戴した方々に感謝したい。また、火野葦平寄託資料の調査にあたっては、北九州市立文学館の中西由紀子・稲田大貴両氏にお世話になった。改めて、心より感謝申し上げたい。なお、本稿は科研費（13K12852・18K00325）の成果である。

注

- (1) 『北九州市立文学館所蔵資料目録Ⅰ 火野葦平寄託資料目録Ⅰ』（北九州市立文学館、二〇一二年）。
- (2) 佐藤充「若松（北九州）が舞台の映画」〔『あしへい』16、二〇一三年二月〕。
- (3) 塩屋智佳子・坂口博「玉井政雄・貞子への火野葦平書簡」〔『あしへい』16、二〇一三年二月〕。
- (4) 木全公彦「幻に終わった『麦と兵隊』」（田中真澄他編『映画読本清水宏 即興するポエジー 蘇る「超映画伝説」改訂版、フィルムアート社、二〇〇九年）。
- (5) 玉井金五郎宛玉井勝則書簡（一九三八年九月一日付、北九州市立文学館寄託、HA2-09226）。
- (6) 玉井良子宛玉井勝則書簡（日付不詳、北九州市立文学館寄託、HA2-09353）。この書簡は封筒がなく、『北九州市立文学館所蔵資料目録Ⅰ 火野葦平寄託資料目録Ⅰ』では宛先未詳としているが、「家の方にも一人も病人や、不幸のなかつたことは、何事よりも嬉しいと思ふ」という気遣いが記される他、出征以来の心情が率直に吐露されており、内容から見て良子宛書簡とみて間

違いない。書簡の中に「今、杭州湾敵前上陸前後の戦闘記「土と兵隊」を書いてゐる」とあることから、注5の金五郎宛書簡と前後して書かれたものと推定できる。

- (7) 田中真澄『小津安二郎と戦争』（みすず書房、二〇〇五年）。
- (8) 「小津安二郎従軍日誌」（前掲、田中真澄『小津安二郎と戦争』）。
- (9) 晏妮『戦時日中映画交渉史』（岩波書店、二〇一〇年）。
- (10) 松崎啓次は、日中戦争の前半期に、中国で中支那派遣軍と東宝とが極秘裏に行っていた映画工作の中心人物である。詳しくは、拙稿「日中戦争期〈大陸映画工作〉への一視点——大妻女子大学図書館所蔵「中支派遣軍報道部映画関係調査資料」を手がかりに」（『大妻国文』四八号、二〇一七年三月）を参照。
- (11) 玉井勝則宛玉井金五郎書簡（一九三八年二月一日付、北九州市立文学館寄託、HA2-07852）。
- (12) 拙著『プロバガンダの文学 日中戦争下の表現者たち』（共和国、二〇一八年）。
- (13) 柴野為亥知（一八九六—一九五九）は金沢出身の陸軍軍人。一九三五年に関東軍に赴任、新聞班に所属し、満洲映画協会の創立に関与した。一九三八年三月から陸軍省新聞班に所属、のち内閣情報部情報官を兼ねる。「詩人中佐」として知られ、「遂げよ聖戦」「大建設の歌」「徐州攻略の歌」「従軍記者行進曲」などを作詞、東海林太郎らがレコードを発売した。
- (14) 火野葦平「解説」（『火野葦平選集 第二巻』東京創元社、一九五八年）。
- (15) 火野葦平宛中山省三郎書簡（一九四〇年七月二十九日付、北九州市立文学館寄託、HA2-08504）。
- (16) 火野葦平宛中山省三郎書簡（一九四〇年一月二十五日付、北九州市立文学館寄託、HA2-08510）。
- (17) 注16に同じ。
- (18) 火野葦平宛中山省三郎書簡（一九四〇年二月三日付、北九州市立文学館寄託、HA2-08511）。
- (19) 火野葦平宛中山省三郎書簡（一九四〇年二月一日付、北九州市立文学館寄託、HA2-08512）。
- (20) 火野葦平宛高村正次書簡（注19に同封）。
- (21) 古川隆久『戦時下の日本映画 人々は国策映画を観たか』（吉川弘文館、二〇〇三年）。
- (22) 火野葦平宛中山省三郎書簡（一九四〇年二月二十七日付、北九州市立文学館寄託、HA2-08572）。

- (23) 火野葦平宛中山省三郎書簡（一九四一年一月二十七日付、北九州市立文学館寄託、HA2-08519）。
- (24) 手帳「東京用件メモ」（北九州市立文学館寄託、HA4-0088）。
- (25) 注3に同じ。
- (26) 中山省三郎（一九〇四～四七）は茨城県真壁郡出身で、親類に詩人の横瀬夜雨がいる。中学時代から詩作をはじめ、早稲田大学高等学院文科・同大学露文科に進む。一九二六年四月、火野葦平・寺崎浩らと同人誌『街』を創刊、計六冊を刊行した（坂口博「解題にかえて——『街』作品集——」『あしへい』21、二〇一八年二月）。ロシア文学者としてはプーシキン、ツルゲーネフ、ゴーゴリなどの翻訳にかかわった。また、火野葦平とは「生涯の友人」（坂口博『校書掃塵——坂口博の仕事I——』花書院、二〇一六年）として交わり、小山書店による『糞尿譚』（一九三八年）の刊行をはじめ、東京での出版社との交渉を一手に引き受けていた。中山の経歴は、小林実「中山省三郎とツルゲーネフ」『立教大学日本文学』一一五号、二〇一六年一月）を参照。
- (27) 注26、坂口博『校書掃塵——坂口博の仕事I——』。